

中国的公共領域としての「包^{パオ} = 第三領域」

— 近現代中国経済社会を理解する手がかりとして —

岑 智 偉

The Chinese Public Sphere: “Bao=Third Realm” as a Clue to Understand the Modern Chinese Economic System

Zhiwei CEN

要 旨

本論文は柏祐賢の「包」と黄宗智の「第三領域」を歴史的な中国「公共領域」として、近現代中国の経済社会を理解するための新しい中国的「公共領域」、即ち「間（あわい）」＝公共としての「包＝第三領域」をその延長線上で考え定義し、帝政晩期から今日までの動的な「伝統中国」における中国的「公共領域」である「包＝第三領域」（「公共領域 i」～「公共領域 iii」）を簡単な動学モデル（動的経済社会システム）で歴史的に示している。

この論文は更に「包＝第三領域」を中国独特の「公共領域」として、「国家」と「社会」の相互作用が繰り返されながら時代と共に変化していると考え。帝政晩期の「包＝第三領域」（公共領域 i）は自律な論理性と特性を持つものであり、1949年から1970年代後半までの「包＝第三領域」（公共領域 ii）は国家の浸透により制度化されたものとなり、そして1970年代後半（政策転換）からの「包＝第三領域」（公共領域 iii）は前述の二つのものを融合しながら新たな「包＝第三領域」として生まれ変わったものとなる。

本論文は、1990年代以降の「包＝第三領域」（公共領域 iii）は旧ソ連のように急激な「西洋的諸要素」への変動がなかったからこそ、その後の中国高度成長を実現させた安定的な社会的環境が与えられたことを簡単な動学分析で示した。この分析から次のことが示唆される。即ち、どの時代においても、中国の歴史の変遷、そして「包」としての中国的経済社会システム、「第三領域」における国家と社会の独特な関係を正確に解釈しなければ、正しく今の中国を理解することはできない。決して西洋の経験から生まれた理想的な論理性だけでは中国の経済社会を観ることはできない。しかしその一方、「伝統中国」を強調しすぎると、再び閉鎖的社会にもなりかねない。その意味において、「西洋的諸要素」と「伝統中国」を俯瞰できる新しい「パラダイム」が必要であり、本論文の中国的公共領域としての「包＝第三領域」分析（動的社會システム分析）は、動的な「伝統中国」と「西洋的諸要素」を客観的に俯瞰できる一つの新しい方法論となることを期待したい。

はじめに

中国の経済社会において「公共領域」があるのか。これを明らかにする前に、まずそもそも「公共領域」とは何か、そして中国において「公共領域」たるものをどう見るべきかについて明確する必要がある。

明清歴史研究者である黄宗智は中国研究に大きな衝撃を与えた「中国研究におけるパラダイムの危機」(黄、1991)¹⁾という論文の中で、中国研究の「パラダイム危機」をもたらした中国経済社会史研究における様々なパラドクスの存在を指摘した上で、次の4つのパラドクスを例として上げている。即ち、(1) 分断された「自然経済」と統合された市場、(2) 公民勢力 (civic power)²⁾の発展を伴わない公共領域の拡大、(3) リベラリズムを伴わない実定法主義、(4) 中国革命における構造的変化と人為的選択の関係³⁾の4つである。とりわけ(2)については、黄(1991)は次のように説明している。明清時代における行会や書院、善堂、義倉といった組織の広がり非国家的な公衆団体の出現としてハーバーマスの「公共領域 (public sphere)」を連想させるかもしれないが、両者は本質的に違うものである。ハーバーマスが言う「公共領域」は西洋的な民主主義のルーツを前提に、公共領域と私的領域、国家と「公民社会 (civil society)」が対峙しながら、相互に浸透し合っているものである。そのような国家と社会を二元的に捉えるハーバーマスの「公共領域」を中国に適応させるなら、西洋的な民主主義のルーツという視点から見れば、中国には西洋経済社会のように「人々の生活における公共領域の拡大及び国家権力に対する市民勢力の対峙の両者が結合していく」(ホアン(1994、唐澤靖彦訳、p.324)のような現象が見られず、むしろ両者が分離している状態であると認識すべきである。1600年～1895年の中国において、確かに市民的公衆団体が出現し広がったが、それらを中国の「公共領域」として考えるならば、国家と対峙しながら「公民勢力」の発展を伴う西洋的な「公共領域」概念とは異なり、パラドクスが生じる。

では、中国において「公共領域」はないのであろうか。黄(1993)は更にハーバーマスの「公共領域」の使い分けに注目した。黄(1993)は「公共領域」が「ブルジョア公共領域 (bourgeois public sphere)」の略称として使われた場合、「公共領域」はある特定の歴史時期(例えば、17世紀後半のイギリスと18世紀のフランス)の現象を表すものとして用いられる。しかし、「ブルジョア公共領域」における「自由主義 (the liberal model)」と「庶民公共領域 (the plebeian public sphere)」を2つの異なるモデルとして厳格に区別し議論されるなら、「公共領域」は2つの概念に対応するものとして用いられる。この場合、「ブルジョア公共領域」ないし「公共領域」は一般性と汎用性を持つ(黄、1993、p.217)。その意味において、黄(1993)はハーバーマスの「公共領域」が多義的なものであり、より広範囲に使用されうるものであると考える。黄(1994)はハーバーマスの広義的な「公共領域」概念から、国家と社会という二元論的な枠組みを超えた「第三領域 (third realm)」を定義し、中国歴

史における「第三領域」の実例として帝政晩期の中国司法体系や地方行政等の事例が挙げられた。「第三領域」は正に黄（1993）が考えている中国的な「公共領域」であると推察される。

黄（1993）の「第三領域」とよく似た考え方は40年ほど前に日本の農業経済研究者である柏祐賢の膨大な研究書で既に示されている⁴⁾。柏（1985a、1985b、1986a）⁵⁾は厳しい自然環境に置かれている農業に従事する人々（例えば、中国華北）は収穫の確定化が非常に困難であることを示した。そこで、「人の対自然行動たる生産において、他の人がその成果の確定化に当たるのである。すなわち人と物との間に第三の人が入りこみ、その成果を確定化するのである。それがすなわち「包」的確定化である」（柏、1985b、p.150）。後に詳しく見ていくが、柏が言う「包」は「完全予見の自己実現（self-fulfilling prophecies）」が要求されている社会において、ある種の自発的なりリスク分散の社会的システムであり、長い封建社会歴史の中で中国伝統社会に生まれた「秩序の自己内形成（ordination）」的な経済秩序と思われる。その「包」は黄（1994）が考えている「第三領域」とよく似ており、偶然にも2人が分析する対象と時代も重なっている。その「包＝第三領域」こそ、中国経済社会を理解する「間（あわい）」＝公共⁶⁾としての中国的「公共領域」ではないかと思われる。

日本において、柏の「包」や黄（1994）の「第三領域」が再び注目されはじめている。加藤（2010、2013）は「包」の考えの中にある「請負」に注目し、「曖昧な制度」としての中国型資本主義という独自の理論を展開し、毛里（2012）は「第三領域」を連想し「三元構造」を考えた。加藤（2013）の「曖昧な制度」については、中兼（2014）は疑問視しその理論修正を求めている。そして、加藤（2014）はそのリプライとして改めて自分の考えを強調した。残念なことに加藤弘之教授は2016年に亡くなられて、それを偲ぶ論集として、中兼（2018）は更に「曖昧な制度」について独自の見解を示した。「曖昧な制度」についての論争が終わったかのように思われるが、柏や黄（1994）の研究をよく吟味するほど、その論争は黄（1991）が言う「パラダイムの前提」⁷⁾なしの論争ではないかと思ふべき、「パラダイムの前提」を考慮せずに理論を展開しようとすれば、「パラダイム危機」に陥る可能性は否定できない。

どの時代よりも今日こそ中国の本質を理解するのに冷静さと智慧が必要であろう。冷静さはいわゆる「経験科学で積み上げられてきた「暗黙の前提」⁸⁾を一旦「切り離す」必要があることを示唆し、そして歴史の中に智慧を求めなければならない。本論文は黄宗智の「第三領域」と柏祐賢の「包としての倫理規律」の考え方を踏まえた上で、中国の経済社会を理解する手がかりとして、新しい中国的「公共領域」とする「間」＝公共としての「包＝第三領域」を用いながら、19世紀から今日までの動的な「伝統中国」の経済社会をわかりやすく解説することを試みる。

本論文は以下のように構成される。第1節では柏の「包」や黄（1993）の「第三領域」を歴史的な中国「公共領域」としてまとめ、2000年封建社会を経験した中国の経済社会を理解するための新しい「公共領域」概念、即ち「間」＝公共としての「包＝第三領域」をその延長線として説明し定義し

てみる。第2節では「包＝第三領域」を、更に現代中国経済社会を解説するものとして、加藤と中兼の「曖昧な制度」論争を検証しながら、現代中国経済社会における「包＝第三領域」の意味を吟味する。第3節では第1節と第2節で定義された中国経済社会における「包＝第三領域」を簡単な動学モデルで示す。このモデルでは動的な「伝統中国」を念頭に置きながら、経済学における「主成分分析」と動学経路の考え方を取り入れ、厳格な数理的演繹なしに中国の「間（あわい）」＝公共としての「包＝第三領域」を歴史的に示してみる。最後のおわりにでは本稿の結論をまとめ、今後の課題を言及する。

1 黄宗智の「第三領域」と柏祐賢の「包としての倫理規律」

黄宗智の「第三領域」はハーバーマスの広義的な「公共領域」とも異なり、国家と社会に影響されながらも融合されることはない。「第三領域」は国家と社会を超越する自律的な論理性と特性を持つものと考えられている（黄、1993、p.225）。黄（1993）は帝政晩期における中国の司法体系、地方行政または県以下の行政を実例として、「第三領域」の存在を示した。例えば、当時の司法体系として、公判（official courts）＝公式な司法（formal legal system）の他に、宗族／社区の仲介（kin/community mediation）のような非公式な司法（informal justice system）も併存していた。しかし、大半の民事訴訟は、公判になるまで、既に両司法を協働させる「第三領域」において斡旋や調停によって解決された。事実上、1760年～清朝末期の四川省巴県等の3地域において、628件の民事訴訟案の中で「第三領域」によって調停された案件は6割（407件）以上もあった（黄、1993、p.226）。そのような「第三領域」は地方行政または県以下の行政にも見られていた。19世紀の中国華北地域に普遍的に存在していた「郷保（xiangbao）」制度も一種の「第三領域」と見なされる（黄、1993、2019）。黄（1993）は帝政晩期における中国経済社会は恰も3段からなるピラミットのように、国家（頂点）と社会（末端）の間に「第三領域」が介在し、その奇妙な関係は中国の独特な経済社会システムを形成し、そして「集権の簡易的統治（centralized minimalism）」⁹⁾はそのような経済社会システムまたは「第三領域」を形成させる大きな要因と基盤であると指摘している。

「第三領域」とよく似た考え方は柏の「包としての倫理規律」である。柏は帝政晩期及び民国時代における中国経済社会秩序はヨーロッパの社会的秩序と異なり、一種の環境に応じて自己自身を内面的に形成する主体的秩序であったと観ている。その要因として、当時の中国の社会的・歴史的環境はヨーロッパとは全く異なっているからである。例えば、「自由」について、ヨーロッパは「権力からの離脱を、自ら権力を持つことによってなそうとした」（柏、1985b、p.151）のに対し、中国社会は「まったく放任されていたのであり、それゆえに自由を有していたのである……その自由を保証されていたのでもなかった。自由な経済生活行動を警察保証してくれる権力支配が存在していなかった」

(柏、1985b, p. 151)。それゆえ、「なんら上からの権力的な保証のない自由を持つ多数個人が、それぞれに自己閉鎖的に規律して、もって自衛するようになる……このようにして中国の経済秩序は、その自然的・社会的および歴史的環境に呼応して、「包」的に自己自身を規律している主体的秩序である」(柏、1985b, pp. 152-155)。四方田(2018)は柏が考えている(中国的な)法・秩序は、「外から拘束していく形の秩序のみではなく、社会の内側から生まれてくる、政府の拘束や影響なくして共同体や商慣習の中から生まれてくる法秩序のことなのである」(四方田、2018, p. 91)と解説している。

このように、柏が観ている中国経済社会秩序は、正しく自律性を持つ「包」的な秩序であり、「あらゆる営みが「包」的律動を持っている。すなわち、営みの不確定性を第三者たる他人に転嫁しようとしている。しかして、「包」的に第三者たる者は、さらにそれを第四者に「包」的に転嫁しようとするであろうから、自ら「包」的な社会秩序は重層的となり、社会を包むに至っているのである。これは、競争的倫理的規律を持つヨーロッパ的社会や、「和」的理論的規律を持つ日本の社会に対比して、著しい違いである」(柏、1985b, p. 155)。

柏の中国経済社会への認識の根底には「中国社会の超越的認識」や「ヨーロッパ社会準拠的認識」を超えた、「個性形成的主体性におけるの把握」(柏、1985b, pp. 14-18)という考え方がある。「個性形成的主体性」または自律的主体の合理的行動として、経済学における「完全予見の自己実現」を想起させる。しかし、不確実性を満ちた帝政晩期・民国時代の中国経済社会においては、リスク分散がなくてはそれらを達成することができない。よって、「包」としての経済秩序は正しく中国伝統社会に生まれた自律的なリスク分散の社会的システムであり、一種の「秩序の自己内形成」的な経済秩序(柏、1986b)であると思われる。

黄(1993)の「第三領域」も柏の「包」としての経済秩序も、長年の封建社会歴史¹⁰⁾を経験した伝統的中国経済社会における中国的「独特性」＝「伝統中国」を認め理解するものである。黄(1993)の「第三領域」が国家と社会の空間的關係に注目しているのであれば、柏の「包」は末端社会における個人(主体)間の人間的關係を重要視するものであろう¹¹⁾。よって、二つの考え方を合わせた「包＝第三領域」は正に近現代の中国経済社会を理解する手がかりとする「間(あわい)」＝公共としての新しい中国的「公共領域」として定義できる。

黄(1993)は中国の「第三領域」が時代と共に変化していると指摘した。1949年直後、国家は凡ゆる領域を干渉し、嘗ての「第三領域」は「国家化(state-ification)」(「第三領域」の制度化)により殆ど無くなり、そして「集団制」は国家が直接に「第三領域」に浸透し国家と社会の相互作用(interactive relationships)により生まれた新たな「第三領域」である。1970年代後半から、「改革開放」という政策転換により、「第三領域」は「脱国家化(de-state-ification)」により、更に変貌した(黄、1993, pp. 235-238)。黄(2019)は西洋的な思考を超越した「第三領域」は帝政晩期の中国のみならず、現代と今日の中国における国家と社会の關係にも適応されると考えている。とりわけ、1949年

以降の「第三領域」は中国の工業化や識字率を含めた国民教育水準の上昇等にも大きく貢献したと分析している（黄、1993、p. 366）。

柏の「包」と黄（1993）の「第三領域」と類似する考え方として、周（2007、2014、2016）の中国官僚行政における昇進競争や行政間の「行政発包制」¹²⁾といった分析が挙げられる。これらの分析では特にインセンティブとしてのエージェンシー問題に注目している¹³⁾。

2 日本における中国「曖昧な制度」論争

柏の「包」、黄の「第三領域」と毛里の「三元構造」の議論を背景に、日本では中国的「曖昧な制度」についての論争が起きている。その論争を整理してみよう。

毛里（2012）は改革後の中国において三段階の構造変動があったと考えている。即ち、「脱社会主義」段階（1980年代）、「資本主義化」段階（1990年代）と「体制変容」段階（2000年代後半）である。しかし、「体制変容」は「期待通りにならなかった¹⁴⁾。よって、毛里（2012）は2012年以降の中国は第二段階にあると観ている。毛里（2012）はその観察の中で、黄宗智の「第三領域」を連想しながら「三元構造」論を展開した。「三元構造」とは中国構造変動過程に現れた新たな経済社会構造、即ち、「中央／地方／末端」、「国家／半国家・半社会／社会」、「計画／半計画・半市場／市場」、「労働者／農民工／農民」といった旧二元構造（例えば、「国家／社会」）と異なる三元的構造のことである¹⁵⁾。毛里（2012）は黄の「第三領域」（1993）も一種の「三元構造」的発想であると見ている（毛里、2012、p. 318）。

加藤（2012、2013）は柏の「包」の倫理規律や毛里（2012）の「三元構造」に注目しながら、制度論や契約論から独自の「曖昧な制度」としての中国型資本主義論を展開した。加藤（2013）は「包」を「請負」の総称として、制度としての「包」（請負）こそ、中国の「曖昧な制度」をもたらす大きな要因であると考えている。更に、加藤（2013）は黄（1993）の「第三領域」と毛里（2012）の「三元構造」を「「包」を補完する二つの仮説」として、毛里（2012）の「三元構造」における「「国家」でもなく「社会」でもない、「計画」でもなく「市場」でもない」といった部分、即ち「半国家・半社会」や「半計画・半市場」が「曖昧」であり、それを基礎とする「曖昧な制度」は「ある種の「構造」を形成している」（前掲書、同上）、即ち、「曖昧な制度」としての中国型資本主義であると指摘した。

中兼（2014）は加藤（2013）の「曖昧さ」の定義に疑問を投げかけ、「*A*でもない、*B*でもない」なら「*A*でもあり、*B*でもある」とも考えられると指摘した。中兼（2014）も制度論や開発論等から、中国の「曖昧さ」が「三元構造」における「重なる」部分というよりも、制度化されない部分の存在が「曖昧」であると指摘している。加藤－中兼論争を以下の図1a（集合論）で整理してみよう。

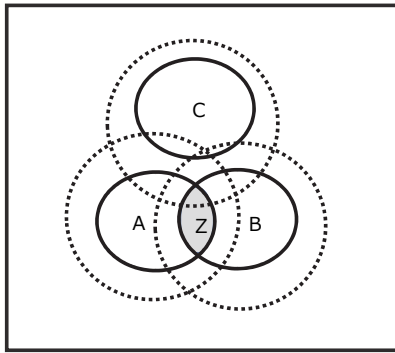


図 1a
 $A \cap B = \{Z \mid Z \in A \wedge Z \in B\}$

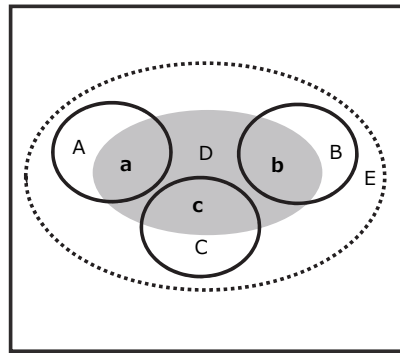


図 1b
 $A \cap B = \phi \wedge B \cap C = \phi \wedge A \cap C = \phi$

図 1a における集合 A と集合 B をそれぞれ「国家」と「社会」とすれば、集合 A と集合 B の共通集合である Z は毛里（2012）が言う「半国家・半社会」に当たる¹⁶⁾。加藤（2013）が問題にしていた「曖昧さ」は正にその部分の存在と、「包」としての経済社会秩序における「上下の命令系統や横向きの契約関係の内容をあえて明確せず、ある種の「曖昧さ」を残すこと」（加藤、2013、p.41）である。一方、集合 A、集合 B と集合 C を「制度化された」部分とし、それらを囲む点線の集合を「制度化されない」部分とすれば、中兼（2014）が考えている「曖昧さ」は「制度化されない」部分（全ての点線集合）と、それぞれ「制度化されない」部分の「重なり」（点線集合の重なり部分＝共通集合）である。この論争は焦点の合わない論争のように見えるが、その要因として、毛里（2012）の「三元構造」と黄（1993）の「第三領域」が同一視されそれらが混同されることと、中国歴史研究の結論としての「包」と「第三領域」を西洋的制度論から見ているからと思われる。この論争は「伝統中国」と（後に説明する）「西洋的諸要素」を俯瞰できる、則ち黄（1991）が言う「パラダイムの前提」がない論争ではないかと思われる。

「三元構造」と「第三領域」の違いについて見てみよう。図 1a における共通集合 Z は確かに毛里（2012）が言う「半国家・半社会」に当たるが、それと黄（1993）が言う「第三領域」とは全く異なるものだと理解すべきであろう。毛里（2012）が言う「半国家・半社会」の例として、中国の「集団制」が挙げられるが、黄（1993）が考えている「集団制」は「国家」が「第三領域」に浸透し、国家と「社会」を協働させる「第三領域」において「制度化」されたものである。即ち、図 1b における集合 A と集合 B を「国家」と「社会」とすれば、黄（1993）の「第三領域」は図 1b における集合 D に当たり、そして、集合 C は「集団制」として考えられる。

このような「第三領域」は中国独特の「公共領域」（筆者の定義）として考えられ、「国家」と「社会」の相互作用が繰り返されながら時代と共に変化している。帝政晩期の「第三領域」（「公共領域 i」とする）は自律な論理性と特性を持つものであり、1949 年から 1970 年代後半までの「第三領

域」(「公共領域 ii」とする)は国家の浸透により制度化されたものとなり、そして1970年代後半(政策転換)からの「第三領域」(「公共領域 iii」とする)は前述の二つのものを融合しながら新たな「第三領域」として生まれ変わったものとなる。一方、柏の「包」的な中国経済社会秩序は、一つの大きな「包み」として、末端社会の人間的關係を含め、より広範囲に考えられる¹⁷⁾。よって、図1bにおける点線集合Eは柏の「包」として定義できる。図1bは正に近現代の中国経済社会を理解するための新しい中国的「公共領域」としての「包＝第三領域」を表している。更に黄(1993)の変化している「第三領域」を考慮に入れば、「包＝第三領域」を近現代における動的な「伝統中国」の「公共領域」として観ることができる。以下の節では経済学における動学的システムの考え方(数学補論を参照)を適応しながら、動的な「伝統中国」における中国的「公共領域」である「包＝第三領域」(「公共領域 i」～「公共領域 iii」)を歴史的に示してみる。

3 中国的「公共領域」としての「包＝第三領域」

図2は動的な「伝統中国」における中国的「公共領域」としての「包＝第三領域」を動学的経済社会システムとして歴史的に示している。

まず、図2の見方について説明しよう。図は二つの軸と四つの象限から構成される。縦軸(北南方向)と横軸(東西方向)はそれぞれ「現代的制度(国家A)／伝統的制度(地方)」と「自由主義的(個人)／中央集権的(国家B)」を表し、二つの軸からなる四つの象限はそれらの諸關係を示す。第I象限は現代的制度(国家A)と自主主義(個人)の關係、第II象限は現代的制度(国家A)と中央集権(国家B)の關係、第III象限は中央集権(国家B)と伝統的制度(地方)の關係、第IV象限は伝統的制度(地方)と自主主義(個人)の關係を表す。それぞれの象限の意味について見てみよう。

第I象限は1000年の封建社会¹⁸⁾を経験し西洋社会に形成(北南方向の矢印)された「西洋的諸要素」を点線集合Cで表している。「西洋的諸要素」とは「主成分分析」的考え方としての西洋社会における制度化された西洋的国家(国家A)と自由主義(個人)に関わる諸要素の關係¹⁹⁾を示すものである。一般的に現代西洋社会において、自由主義的な要素は制度化された現代国家(国家A)で実現されると考えるので、諸要素の關係は正の關係であると考えられる。一方、1949年以降の中国社会主義のモデルとなる旧ソ連は同じ西洋文化圏であるが、制度化された西洋的現代国家(国家A)とはならず²⁰⁾、それと異なる中央集権的国家(または社会主義国家、国家B)²¹⁾となり(北南方向の矢印)、第II象限の点線集合Dは同じく「主成分分析」的考え方としての現代的制度(国家A)と中央集権的国家(国家B)に關係する諸要素の關係(負の關係として考えられる)を表し、これらを「中央集権的諸要素」と呼ぼう。これらに対し、第III象限と第IV象限は帝政晩期から今日までの「伝統中国」における中央集権的国家(国家B)、伝統的制度(地方)と自由主義(個人)に関わる諸要素の關係

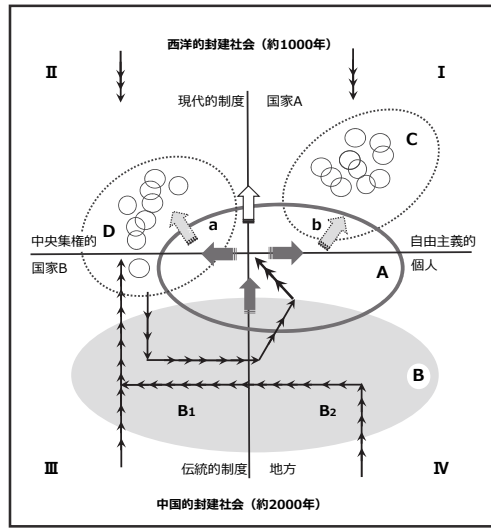


図 2

$$B_1 \cap B_2 = \phi \wedge B_1 \cup B_2 = B ;$$

$$A \cap D = \{a | a \in D \wedge a \in A\} ; A \cap C = \{b | b \in C \wedge b \in A\}$$

を表す。第Ⅲ象限と第Ⅳ象限における集合 B （塗りつぶし）は図 1b で示されている「包＝第三領域」に相当する。それは 2000 年封建社会²²⁾を経験した「伝統中国」で生まれた（南北方向の矢印）中国的「公共領域」として理解し、時代と共に変化する（「公共領域 i」～「公共領域 iii」）。集合 B は更に B_1 と B_2 に分かれる。 B_1 は「伝統中国」における中央主権的国家（国家 B）と伝統的の諸要素関係、 B_2 は「伝統中国」における伝統的の諸要素関係と自由主義（個人）の諸要素関係を表す。一方、図 1 のその他の矢印は変化する「第三領域」（「公共領域 i」～「公共領域 iii」）を示し、表 1 はそのような変化はこの動的な社会システムにおいてどのような結果につながるのかについて説明している。以下では数学補論を参照し、図 1 と表 1 を用いながら、動的な「伝統中国」における中国的「公共領域」としての「包＝第三領域」（「公共領域 i」～「公共領域 iii」）を歴史的に示してみよう。

まず、帝政晩期の「包＝第三領域」を見てみよう。2000 年封建社会を経験した「伝統中国」で生まれた中国的「公共領域」、即ち「包＝第三領域」（「公共領域 i」）は中央集権的国家 B と伝統的の諸要素関係における地方（または地方政府）の関係を表す B_1 と、伝統的の諸要素関係に個人間の関係を表す B_2 で表される。 B は正に黄（1993、2007、2019）が言う「集権の簡易的統治」の構図として見る事ができる。つまり、 B_1 と B_2 はそれぞれ帝政晩期における中央と地方、末端地方（社会）における各主体間の関係を表すなら、 B は高度化された中央集権的国家と「簡易統治」化（放置）された末端社会の関係、即ち柏の「包」としての主體的秩序として考えられる。

一方、1949 年から 1970 年代後半までの「包＝第三領域」は「公共領域 i」から「公共領域 ii」へ

表 1

	(1) I / II - ①	(2) II / III - ②	(3) III / IV - ③	(4) IV / I - ④
現代的制度 (国家 A) 伝統的制度 (地方)	現代的制度 ↓ 伝統的制度 ↑	現代的制度 ↓ 伝統的制度 ↑	現代的制度 ↑ 伝統的制度 ↓	現代的制度 ↑ 伝統的制度 ↓
自由主義的 (個人) 中央集権的 (国家 B)	自由主義的 ↑ 中央集権的 ↓	自由主義的 ↓ 中央集権的 ↑	自由主義的 ↓ 中央集権的 ↑	自由主義的 ↑ 中央集権的 ↓

の変化を考慮しながら動的に観ることができる。 B_2 から B_1 への動き（東西方向の矢印）は帝政晩期の「第三領域」（例えば、「郷保」制等）が制度化された（例えば「居民委員会」に変貌した）プロセスを表し、そして「集団制」は「国家」が「第三領域」に浸透した結果とし B_1 領域における中央と地方（社会）の関係から生まれたものと考えられる。1950 年代以降に行われた本格的な「国有化」は前述の黄（1993）が言う「国家化」を想起させ、 B の凡ゆる要素（集合 B ）は「中央集権的諸要素」（社会主義的要素）に吸収（社会主義化）され、 B から D までの動き（南北方向の矢印）はそれを示している。

1970 年代後半の政策転換によって嘗ての「包＝第三領域」（「公共領域 i」）が再び活用されながら、新しい「包＝第三領域」（「公共領域 iii」）として生まれ変わった。その「包＝第三領域」（「公共領域 iii」）は 1990 年以降の中国経済成長に大いに貢献したと思われる。その要因として、1970 年代後半からの改革政策は旧ソ連のような変革（「中央集権的諸要素」 D から「西洋的諸要素」 C への変化と考えられる）とはならず、「伝統中国」における「包＝第三領域」（「公共領域 i」）がうまく「活用」されたことが挙げられる。 D から B への動き（北南方向の矢印）は、統制化（国家化）された「公共領域 ii」が再び「公共領域 i」に戻ったことを示している。黄（1993）と毛里（2012）の言葉を借りて言えば、この過程は正に「脱国家化」または「脱社会主義」の過程である。しかし、これは帝政晩期の「包＝第三領域」とは異なり、社会主義の洗練を受けた、新たな「包＝第三領域」（「公共領域 iii」）として生まれ変わったものとなる。

1990 年代以降、「包＝第三領域」（「公共領域 iii」）は更に B から A にシフトした（南北方向の濃い矢印）と見られる。その動きは「包＝第三領域」そのものが「西洋的諸要素」への方向転換かのように思われる。毛里（2012）が考えている「資本主義化」はそれに当たる。しかし、「包＝第三領域」（「公共領域 iii」）は毛里（2012）が期待していた「体制変容」への方向転換、即ち、 A から C にはならなかった²³⁾。その変動がなかったからこそ、その後の中国高度成長を実現させた安定的な社会的環境が与えられた。つまり、動学的に考えれば、変動された「包＝第三領域」（「公共領域 iii」、集合 A ）は図 2 と表 1（図 3 と表 2）で示しているように、この動学システムの全ての領域（I / II - ①

～Ⅳ／Ⅰ－④)と関わり、この動学システムでは最も安定的な時間経路(線Ⅰ＝鞍点経路)は原点を定常状態(安定的な状態、図3を参照)とするものである(Ⅱ－①とⅣ－③の領域における時間経路)。もし、AからCへ変化しようとする(Ⅳ／Ⅰ－④領域での動き)、この動的な社会システムが不安定となる。その要因として、この動的システムにおけるⅣ／Ⅰ－④領域では、どの出発点からの動きも定常状態(原点＝鞍点)に向かう時間経路(鞍点経路)から外れてしまったからである。図3で表されているように、Ⅳ／Ⅰ－④領域では、AはCには行けず現代的制度(国家A)的な要素の弱い自由主義(個人)の方向に向かい、即ち極端な自由主義(放置された自由主義)への方向に向かうことになる。図3のⅣ／Ⅰ－④領域における北東方向に向かう矢印はそれを示している。そのことについて最も説得力のある事例は旧ソ連からロシアへの変革である。1990年代の旧ソ連の改革は「中央集権的諸要素」Dから「西洋的諸要素」Cへの変貌だと考えられるが、西洋社会の諸要素が全くなかった旧ソ連は突然に「西洋的諸要素」へと動こうとした結果、現代的制度(国家A)的な要素なしの自由主義(個人)、即ち極端な自由主義(放置された自由主義)に向かってしまった。1990年代初期のロシアは正にその状態であった。図3のⅠ／Ⅱ－①とⅣ／Ⅰ－④の領域における南東方向に向かう矢印はそれを表している。

新しく生まれ変わった中国的「公共領域」である「包＝第三領域」は中国の経済社会システムとして、将来的には徐々に現代的制度の方向に向かう(図2の北に向かう白い矢印で表す)と思われるが、西洋社会と異なる「伝統中国」的な諸要素に合う変革としなければ、旧ソ連の教訓が中国の現実となりうる。一方、「西洋的諸要素」を拒み、「伝統中国」を強調しすぎるのであれば、再び閉鎖的社会になりかねない。よって、「パラダイムの前提」を有し「西洋的諸要素」と「伝統中国」を俯瞰できる新しい「パラダイム」が必要である。その意味において、本論文の中国的公共領域としての「包＝第三領域」分析(動的な社会システムモデル)は、動的な「伝統中国」と「西洋的諸要素」を客観的に俯瞰できる一つの新しい方法論を提供しているかもしれない²⁴⁾。

おわりに

本論文は柏祐賢の「包」と黄宗智の「第三領域」を歴史的な中国「公共領域」として、近現代中国の経済社会を理解するための新しい中国的「公共領域」、即ち「間(あわい)」＝公共としての「包＝第三領域」をその延長線上で考え定義し、帝政晩期から今日までの動的な「伝統中国」における中国的「公共領域」である「包＝第三領域」(「公共領域ⅰ」～「公共領域ⅲ」)を簡単な動学モデル(動的な経済社会システム)で歴史的に示している。

本論文は更に「包＝第三領域」を中国独特の「公共領域」として、「国家」と「社会」の相互作用が繰り返されながら時代と共に変化していると考え、帝政晩期の「包＝第三領域」(公共領域ⅰ)

は自律な論理性と特性を持つものであり、1949年から1970年代後半までの「包＝第三領域」（公共領域 ii）は国家の浸透により制度化されたものとなり、そして1970年代後半（政策転換）からの「包＝第三領域」（公共領域 iii）は前述の二つのものを融合しながら新たな「包＝第三領域」として生まれ変わったものとなる。

本論文は、1990年代以降の「包＝第三領域」（公共領域 iii）は旧ソ連のように急激的な「西洋的諸要素」への変動がなかったからこそ、その後の中国高度成長を実現させた安定的な社会的環境が与えられたことを簡単な動学分析で示した。この分析から次のことが示唆される。即ち、どの時代においても、中国の歴史の変遷、そして「包」としての中国的経済社会システム、「第三領域」における国家と社会の独特な関係を正確に解釈しなければ、正しく今の中国を理解することはできない。決して西洋の経験から生まれた理想的な論理性だけでは中国の経済社会を観ることはできない。しかしその一方、「伝統中国」を強調しすぎると、再び閉鎖的社会にもなりかねない。その意味において、「西洋的諸要素」と「伝統中国」を俯瞰できる新しい「パラダイム」が必要であり、本論文の中国的公共領域としての「包＝第三領域」分析（動的社會システム分析）は、動的な「伝統中国」と「西洋的諸要素」を客観的に俯瞰できる一つの新しい方法論となることを期待したい。

今後において、以上の動的社會システム（動学モデル）をより厳密に特定化し数理演繹を行う必要があり、更にこの動学モデルの正当性を歴史資料に基づいて検証することも必要であろう。これらを今後の課題としたい。

数学補論

この補論では、本論文における動的な「 \dot{z}_t 」モデルを数理的に説明してみよう。前述の中国歴史変遷を現実的背景として、モデルは次の連立微分方程式、即ち $\dot{z}_t \equiv d\log(z_t)/dt = az_t + bm_t$ と $\dot{m}_t \equiv d\log(m_t)/dt = cz_t + dm_t$ で表すことができる。

ここでは、 z_t と m_t はそれぞれ、 t 期における「現代的制度（国家 A）／伝統的制度（地方）」と「中央集権的（国家 B）／自由主義的（個人）」を表し、 \dot{z}_t と \dot{m}_t は z_t と m_t の時間微分（時間と共に z_t と m_t の変化）を表す。 $a = f(\nabla_1)$ 、 $b = f(\nabla_2)$ 、 $c = f(\nabla_3)$ 、 $d = f(\nabla_4)$ はこのモデル（動学システム）における諸要素及びそれらの関係を示す関数である。簡単のために、ここでは各関数の特定化を行わない。但し、 $f(\nabla_1) > 0$ 、 $f(\nabla_2) > 0$ 、 $f(\nabla_3) > 0$ 、 $f(\nabla_4) < 0$ とする。よって、このモデル（動学システム）は位相図（図 3）によって可視化される。

象限 I～象限 IV は本文の図 2 に対応し、図 3 のように、 $\dot{z}_t = 0$ と $\dot{m}_t = 0$ よりこのモデルは更に 4 つの領域（①～④）に分かれる。それぞれの領域では z_t と m_t の変化方向（符号）が定まるので、時間と共にこのモデルは「動的」にどのように変化していくのかを確認ができる。各領域における z_t

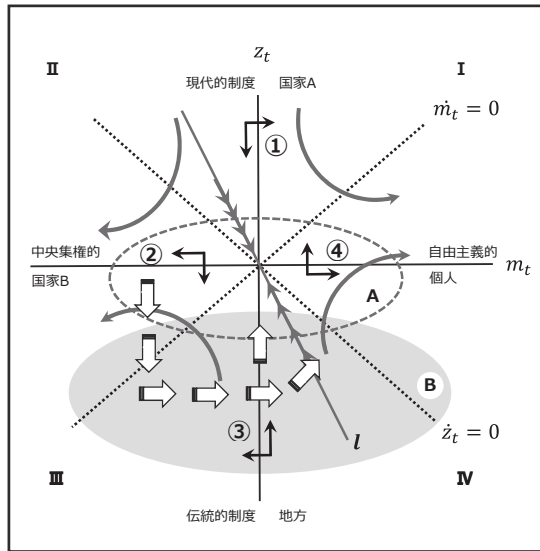


図 3

表 2

	①	②	③	④	
z_t :	現代の制度 (国家 A) 伝統的的制度 (地方)	$z_t \downarrow$	$z_t \downarrow$	$z_t \uparrow$	$z_t \uparrow$
m_t :	自由主義的 (個人) 中央集権的 (国家 B)	$m_t \uparrow$	$m_t \downarrow$	$m_t \downarrow$	$m_t \uparrow$

と m_t の変化は表 2 でまとめられる。なお、各領域では異なる 2 つの象限の一部が重なっていることを注意されたい。各領域の動的変化（動き）は次のように理解される。例えば、領域①では z_t と m_t の変化が $z_t \downarrow$ と $m_t \uparrow$ のように示されているが、それは現代の制度（国家 A）を表す z_t が徐々に弱くなり、自由主義的（個人）を表す m_t が段々と強くなることを意味する。これに対する領域③ではこれと反対の動き、即ち現代の制度（国家 A）が徐々に強くなり、自由主義的（個人）が段々と弱く（中央集権的が強く）なることを意味する。領域②と領域④ではそれぞれ現代の制度と自由主義的が共に弱くなる場合とそうでない場合を表す。

このモデル（動学システム）では、定常状態（原点、 z_t と m_t が共に変化しない安定的な状態）に向かう安定的な時間経路は一つだけが存在する（このモデルにおける特性方程式は $v^2 - Trace \times v + Det = v^2 - f(\nabla_1) \times v + (f(\nabla_1) \times f(\nabla_4) - f(\nabla_2) \times f(\nabla_3))$ である。 $f(\nabla_4) < 0$ であるため、 $Det < 0$ となる。一方、 $Trace = f(\nabla_1) > 0$ 、 $v_1 \times v_2 < 0$ であるため、サドル・安定性が満たされる）。領域①

と領域③における原点（鞍点 = saddle point）に向かう時間経路（線 l = 鞍点経路）がそれである。 z_t と m_t の初期値（出発点）がその経路（線 l ）上にあった場合は、 z_t と m_t が共に（安定的）定常状態に収斂していくが、それ以外の場合は全て発散していく（定常状態から離れていく）。

注

- 1) 黄宗智論文の多くは英文で書かれており、中国でも日本でも多く翻訳されている。その際、著者名の翻訳について日本と中国が異なっており、混乱をさけるため、本論文では黄宗智論文の全てについて、「黄」で統一する。なお、論文の掲載日は全て英文論文の掲載日に合わせている。例えば、黄（1991）は参考文献の Huang（1991）の掲載日に合わせている。なお、論文の引用についてもそのページ数は全て英文論文のページ数を表す。
- 2) civic は「公民」と訳されたり、「市民」と訳されたりしているが、本論文では引用文以外は civic = 公民とする。訳文の公民と市民の区別については、滝田（2020）を参照。
- 3) 中国革命の中の構造的変化と人為的選択の関係について、中国国内の学者とアメリカ学者の見方は全く正反対であり、それが一つのパラドクスとして見なされている（黄、1991、pp. 324-327）、
- 4) 本稿が参照している『柏祐賢著作集（3-5、7）』は既に1948年に人文書院から出版されていた。詳しくは加藤（2010）を参照。
- 5) 以下では引用以外は柏（1985a、1985b、1986a）を「柏」とする。
- 6) 東郷他編著（2017）の第2部を参照。
- 7) 原文では paradigmatic assumption（黄、1991、p. 308）、中国語の同論文では「規範信念」（黄、1993、p. 47）で表現している。ここではホアン（1994、唐澤靖彦訳、p. 314）を参照している。
- 8) 毛里（2012、313-314頁）
- 9) 「集権の簡易的統治」とは中央集権の高度化と、社会末端の統治「簡易」化が併存する統治方法である（黄、1993、2007）。このような統治方法は行政コストの削減ができるメリットがあるものの、末端の社会が放置されるというデメリットもある。
- 10) 柏は秦以降の中国を封建制度的国家として認めていない。「ヨーロッパでは覇道的であり、法治主義的であるが、中国においては王道的であり、礼治主義的である」（柏、1995b、p. 66）と考えているように、柏は中国は「礼治主義」国家ないし「専制的な統一」国家であると観ている。中国の封建制度については柏は「秦の時代に中央集権の郡縣制度が行われるようになってから滅びてしまった」（前掲書、p. 68）とし、中国は「天子の専制的な国家であるように見える」（柏、1995b、p. 69）と考えている。
- 11) 柏は凡ゆる面でもより広範囲に中国の「包」を観ている。例えば、柏（1995b）の第三章の「「包」的倫理と天および天子」において、「天と人との間を「包」的にとりもつ者がある。それが天子である」（柏、1985b、p. 165）とし、天子（= 皇帝）は「至人であるが、同時に私人である…中国の天子はかくして中国の経済社会の、営みの不確定性を確定化しようという合理化過程において、高度に経済機能的であり…中国の天子、ひいては中国国家の経済社会的機能は、驚くべきほどに積極的なものでさえもある」（前掲書、同上）と分析している。
- 12) 周（2014、2016）の「行政発包制」は柏祐賢の「包」を連想させるが、おそらく「英雄所見略同（中国の諺：Great minds think alike）」であろう。

- 13) 清水（2003）は小作制度における固定小作料制度（一種の「請負」と見なす）は分益小作制度よりインセンティブとしての小作農の努力が高く、産出も高くなることを簡単なエージェンシーモデルで示している。この意味において、「包」を「請負」として考えるなら、「包」としての経済社会秩序はそれなりの合理性を持つと考えられる。
- 14) 毛里（2012）の「体制変容」はS・ハンチントンの「体制変容」論を根拠にしている。
- 15) 毛里（2012）の表1を参照。
- 16) 集合論的に言えば、これは正に中兼（2014）が言う「Aでもあり、Bでもある」のケースとなる。
- 17) 脚注11を参照。
- 18) 陳（2006）を参照。
- 19) 図2の「現代的制度」や「自由主義的」といった用語は包括的な表現であり、色々な要素が含まれているものとする。例えば、「現代的制度」には西洋的な憲政や法制といった要素があり、「自由主義的」には個人所有権や自由選挙といった要素もある。ここでは簡単に、これらの要素を「諸要素」として表現する。
- 20) 河原地（2020）を参照。
- 21) 「中央集権的（国家B）」は「中央集権」という意味から、社会主義国家を表すと同時に、中国帝政晩期の中央国家も表せる。
- 22) 陳（2018）は中国の春秋戦国時代（または始皇帝）を中国の封建社会の始まりとするなら、中国の封建社会が終焉したと思われる1840年（清朝、道光）まで、中国は約2000年強の封建社会を経験したと指摘した。
- 23) 1970年代後半から1990年代までの中国における一連の動きは、Bにおける西東方向の矢印、東北方向の矢印と北西方向の矢印で示されている動きのように、この動的な社会システムにおける鞍点経路（線I）上での動き（BからAへの動き）だと思われる。
- 24) 「包＝第三領域」（「公共領域iii」）では多くの問題をもたらしていることは否定できない。変貌された「包＝第三領域」（「公共領域iii」、集合A）は「西洋的諸要素」C、「中央集権的諸要素」Dとも関わり、その「重なり」部分（AとD、Cの共通集合）が加藤（2013）の言う「曖昧」的なものであるかもしれない。例えば、現在中国における医療改革問題、即ち、公共財として行うべき医療サービスが利潤動機に基づき、「請負」方式で運営されている問題は、図2におけるAとDの「重なり」部分（「AとDの共通集合」＝a領域）で生じたものと思われる。岑他（2014）の「灰色収入」についての分析もaの領域で起きた問題だと考えられる。

参考文献

（日本語）

- 〔1〕加藤弘之（2010）「移行期中国の経済制度と「包」の倫理規律」中兼和津次編著『歴史的視野からみた現代中国経済』ミネルヴァ書房。
- 〔2〕加藤弘之（2013）『「曖昧な制度」としての中国型資本主義』NTT出版。
- 〔3〕加藤弘之（2014）「中兼和津次氏の「曖昧な制度」批判に答える」『中国经济研究』第11巻第2号
- 〔4〕柏祐賢（1985a）『柏祐賢著作集 第3巻経済秩序個性論（Ⅰ）中国经济研究』京都産業大学出版会
- 〔5〕柏祐賢（1985b）『柏祐賢著作集 第4巻経済秩序個性論（Ⅱ）中国经济研究』京都産業大学出版会
- 〔6〕柏祐賢（1986a）『柏祐賢著作集 第5巻経済秩序個性論（Ⅲ）中国经济研究』京都産業大学出版会
- 〔7〕柏祐賢（1986b）『柏祐賢著作集 第7巻危機の歴史観』京都産業大学出版会
- 〔8〕河原地英武（2020）「ロシアにおける公共と経済」中谷真憲・東郷和彦編著（2020）『公共論の再構築：時間／空間／主体』藤原書店。

- [9] 滝田豪 (2020) 「中国における市民社会」中谷真憲・東郷和彦編著 (2020) 『公共論の再構築：時間／空間／主体』藤原書店。
- [10] 東郷和彦・森哲郎・中谷真憲 (2017) 『日本発の世界「思想」』藤原書店。
- [11] 毛里和子 (2012) 「台頭中国をどう捉えるか」毛里和子・園田茂人編『中国問題キーワードで読み解く』東京大学出版会。
- [12] 中兼和津次 (2014) 「「曖昧な制度」とは何か——加藤弘之『「曖昧な制度」としての中国型資本主義』を読んで——』『中国経済研究』第11巻第1号
- [13] 中兼和津次 (2018) 「「曖昧な制度」とその意味について再度考える——加藤弘之著『中国経済学入門』名古屋大学出版会、2016年を読んで』『中国経済研究』第2巻第1号
- [14] 四方田雅史 (2018) 「経済学説史における柏祐「経済秩序」論の位置」『武蔵野大学政治経済研究所年報』武蔵野大学政治経済研究所。
- [15] 清水克俊 (2003) 『インセンティブの経済学』有斐閣。
- [16] 岑智偉・青木芳将・土居潤子 (2014) 「中国の「灰色収入」の推定について——2007年CHIPデータを用いた検証——」Faculty of Economics, Kyoto Sangyo University DISCUSSION PAPER SERIES 2014-2, pp. 1-36。

(中国語、英語)

- [17] 陳旭麓 (2006) 『近代中国社会的新陳代謝』上海社会科学院出版社。
- [18] 黄宗智 (1993) 「中国研究の規範認識危機—社会経済史的悖論現象」(中国語)『中国人民大学歴史与社会高等研究所 (http://www.lishiyushehui.cn/modules/topic/detail.php?topic_id=71) / Philip C. C. Huang (1991), “The Paradigmatic Crisis in Chinese Studies: Paradoxes in Social and Economic History” *Modern China*, 17, 299-341 / フィリップ・ホアン (1994) 「中国におけるパラダイムの危機」(唐澤靖彦訳)『中国——社会と文化』第9号。
- [19] 黄宗智 (2003) 「中国的“公共領域”与“市民社会”？—国家与社会間的第三領域」黄宗智編著『中国研究の範式問題討論』(中国語)、社会科学文献出版社、pp. 260-285 / Philip C. C. Huang (1993), “Public Sphere / Civil Society in China? The Third Realm between State and Society,” *Modern China*, 19, 216-240.
- [20] 黄宗智 (2007) 「集権の簡約治理—中国以准官員和糾紛解決為主的半正式基層行政」(中国語)『中国鄉村研究』第5巻、福建教育出版社、1-23 / Philip C. C. Huang (2008), “Centralized Minimalism: Semiformal Governance by Quasi Officials and Dispute Resolution in China” *Modern China*, 34, 9-35.
- [21] 黄宗智 (2019) 「重新思考“第三領域”：中国古今国家与社会の二元合一」(中国語)『開放時代』第3期 / Philip C. C. Huang (2019), “Rethinking “the Third Sphere”: The Dualistic Unity of State and Society in China, Past and Present” *Modern China*, 45, 354-391.
- [22] 周黎安 (2007) 「中国地方官員の晋昇錦標比賽模式研究」『經濟研究』、中国社会科学院、第7期、36-50。
- [23] 周黎安 (2014) 「行政発包制」『社会』、上海大学、第36巻、1-28。
- [24] 周黎安 (2016) 「行政発包的組織の境界」『社会』、上海大学、第36巻、34-64。